

## 「日本における昨今の問題点とキリスト者」 (文中敬称略)

### ★政治・社会の問題点

国旗・国歌法制定 (1999 年) 以来、学校における「日の丸・君が代問題」が教育との関わりで避けて通れない事態となっている。

「罰則規定は設けない」、「強制はしない」と政府が言って「国旗・国歌法」が強行可決された 1999 年以降、卒業式・入学式において実施強要がエスカレートした。それまでの実施率が極端に低かった沖縄県、広島県、三重県、東京都などでは、特別に教職員、児童・生徒に対しての締め付けが強化され、教職員には服務規定違反として重い罰則が科せられるようになった。憲法で保障されている信教・表現の自由も軽視され、石原知事、米長委員が主導する東京都では、「通達」に違反する教職員の処分が「お上に逆らう者への見せしめ」として、全日本に向けての脅迫・圧力となっている。

憲法改正の前段階としての、「**国民投票法案**」が 2007 年 5 月に可決成立した。

安倍前首相が在任中に強行したもののひとつに、憲法改正への足かかりとしての「国民投票法」がある。戦後のクリスチャンたちの日本社会へ向けての発言を支えていた、憲法が保障する「信教の自由」「集会結社の自由」「表現の自由」「戦争放棄」なども、改憲されたら当然ながら使用できなくなる。たとえ憲法の後ろ盾が無くなってしまったとしても、聖書の従って真の神様に仕える証を立てていく心構えが一人一人のクリスチャンに必要な。

### 教育基本法 改正(2006 年 12 月) 教育関連三法 改正(2007 年 5 月)

安倍前政権は、一国会期間中に 15 回も与党単独の強行採決を行った、異例の内閣である。衆議院の圧倒的多数を利用して重要法案を次々と通し、日本の真の独立を訴えつつ、世界からの孤立を招こうとしている。成績悪化や学校での諸問題、社会モラルの低下は、教育基本法に問題があったのではなく、それを履行しなかった文部科学省や教育委員会の責任である。しかし、「愛国心」を再度用いて国民を統制しようとする動きは、戦前思想への復帰をもくろむ人たちによって着実に進められている。我らの先輩たちの、「神社参拝拒否事件」の時のように、教育現場が再度クリスチャンたちの信仰の戦場になる日が遠くないのではないかと。

**皇国史観の台頭・右傾化の拡大の社会で**、国会で「**共謀罪**」が審議中である。

これは戦前の治安維持法と類似しているが、それ以上の悪法になることが明白なので、一部の知識人だけではなく出版・通信業界からも批判が大きい。政府はテロ対策のためとしているが、一度法制化されると、とても危険な方向へ進むことを止められなくなる。この法案が関連する重要法案は 620 以上にもなり、「犯罪・テロ抑止のため」として、未遂の犯罪をも暴き裁くことになるので、盗聴・盗写・密告を奨励する恐ろしい社会になってしまう。

### 一信者としての「信仰の証」の重要性

いのちのことば社発行 21 世紀ブックレット 36 『それでも主の民として』(2007 年 9 月)に紹介しているが、今の社会情勢を知り、今後の日本社会においてクリスチャンの証とはどうあるべきか。

信仰の先輩たちの足跡を参考にすると、団体・グループとしてではなく、一信者と

しての証が有効であることが分かる。「満場一致」を好む「日本の国体(国柄)」は、一人でも反対する者がいるとガタガタと崩れてしまうもろさを持っている。しかし、迫害弾圧の時の妥協強要はかなり厳しい。「誰が何を言っても、していても、私は主に従って行く」という心構えをすべての信徒が持っているべきだ。

1933 年美濃ミッションが大垣で弾圧されていた同時期、愛知県の弥富の紡績工場でも、神社参拝をしなかったクリスチャンの女工主任に対して会社から解雇処分が出た。女工たち 600 人がこの事に抗議してストライキを、行ったため会社は困惑した。不信者でも、信仰に立つ信者たちをよく観察し、その態度を尊敬していることが良く分かる記録だ。詳しくは、『それでも主の民として』参照。

参考文献として、日本キリスト教団出版局発行『変わっていくこの国で 戦争期を生きたキリスト者たち』石浜みかる著も紹介したい。この本の中には、美濃ミッション創立者のワイドナーについても記載されている。

## ★キリスト教界内の問題点

### (A) 聖書解釈、習慣理解

#### 『ダ・ヴィンチ・コード』、『ユダの福音書』などの偽典問題

『聖書』は真の神のみことばであるために、人類史上くり返しこのような攻撃に遭ってきた。しかし、偽典・外典によって、本物の価値がさらに証明されてきた。このようにトンデモ本に翻弄されないように、聖書を良く読み、真理をより深く理解しておく必要がある。

『ユダ福音書』は、2～3 世紀に出た偽典である。

『ダ・ヴィンチ・コード』は、ダン・ブラウンの小説にすぎない。ハンク・ハネグラフ、ポール・L・マイアー共著『ダ・ヴィンチ・コード その真実性を問う』いのちのことば社発行など。参考文献はキリスト教書店でも多く取り扱っている。

#### 「ハロウィーン」について (資料① 後述 JCM ニュース参照)

欧米の行事・習慣が輸入されると、すぐにキリスト教文化・儀式と誤解されやすい。ハロウィーンは日本において現在、学校や公共の場で拡大しつつある。信者は明確に「クリスチャンとは無関係なものであること」を明確に発表すべきだ。

### (B) 聖書的イスラエル理解、パレスチナ・中東問題対応

#### ・ 契約神学・置換神学の問題点 (資料②後述「アイデンティティーの混乱」参照)

ほとんどのキリスト教会が、契約神学を保持しているため、イスラエルに対する解釈・理解が真の意味で聖書的ではなくなっている。それが現在のキリスト教会の持っている基本姿勢である、「親パレスチナ・反イスラエル」的政治姿勢である。

#### ・ 日ユ同祖論

(J&J ミニストリーズ発行 2007 年 9 月号「つのぶえ」紙より中川健一「日ユ同祖論」参照)

神道とユダヤ教や日本とユダヤの類似性のみを協調し、相違点は無視するという論法は乱暴なこと。ヘブル語も日本語良く知らない者たちによる、言語的語呂合わせも良く用いられるが、信憑性に欠ける。日ユ同祖論が、キリストの福音に取って代わる

危険性を注意しなければならない。

その他の参考文献として、「イスラエルトゥディ誌2006年8月号9月号10月号の三回にわたって連載された、「日ユ同祖論はどのようにして生まれたか」と、ミルトス発行ベン・アミ・シロニー、河合一充共著『日本とユダヤその友好の歴史』などを参照。

### ①聖書と日本フォーラム

クリスチャンと名乗る彼らが、ユダヤ教と神道・神社の類似性を強調し、「神道は偶像崇拝をしていない」と主張する。また日本にイスラエルの失われた十部族が渡来しているため、方言や習慣の中にユダヤ性を発見・発掘したと主張。「日本人もユダヤ人の末裔であるから、神の選民である日本の繁栄は必至、当然神は日本を祝福する。」と解説する。つまり日本性はユダヤ性とイコールであるという考えで、今までの偶像崇拝と対抗する伝道方法に挑戦している。

イエス様の十字架よりも、ユダヤ性を強調して、福音宣教の根本を逸脱しているから、日ユ同祖論がキリスト教会で福音・教理にさえ悪影響をもたらしている典型である。

### ②アロハ・ケ・アクア・ミニストリーズ（ダニエル・キカワ）のDVD 「神が日本に残した指紋」

日本の歴史や宗教の流れに無知であったり、聖書理解にも片寄りがあるために、残念ながら多くのクリスチャンはこのような奇異・奇抜なアイデアに反論ができないばかりか、鵜呑みにしてしまう危険性がある。

「茶の湯を否定するクリスチャンたちがいるが、茶の湯からクリスチャンが学ぶことがたくさんある」と主張している。この論理は本末転倒で、そもそも千利休以降、茶道の方がキリシタンたちから聖餐式の方法などを借用して形成されたのであるから、類似点や、強調点があっても少しも不思議ではない。この事に関して調べたいならば、いのちのこば社フォレストブックス発行『茶の湯の心で聖書を読めば』高橋俊夫著を参照のこと。

## (C) 宣教と教理の問題

### 「エリヤハウス」などの、インナー・ヒーリング活動

心の傷、虐待の記憶などを消す方法として、和解を強調。聖書的と思わせるカウンセリングを用いるが、じつに内容は催眠療法や心理学を多用して、福音やイエス様の十字架抜きの和解を強調する。心を病む人が多い社会に対しての活動として、教会内に浸透しつつある。宣教師・牧師たちで熱心に利用している人たちもあるので要注意。

### 「世界福音化傳道教會」略称「多楽房(タラッパン)」

引きこもりなどの家庭問題、教勢不信という教会問題に対応できるという方法で侵入。テキスト・マニュアルが定められていて、説教準備・伝道訓練が不要で即実行できるものとして信徒・牧師たちに迫るやり方。中部日本では、すでにいくつかの教会が被害を受け、信徒を奪われて解散に追い込まれた教会さえもある。関東では統一協会とよく似たものと思われる。その手法は、勉強会として若者たちを集めて、グループに引き入れるから。彼らは、当初、以前は異端と呼ばれていたが、今は正当

なキリスト教会であると名乗っている。

教理的違いは十字架よりも復活を強調することなど、聖書真理からやや離れているが、最も警戒すべきはカルト的な「〇〇先生に祈ってもらったら病気が治る」という手法である。

### 「ウイットネス・リー」回復教会など

ウォッチマン・ニーの弟子と称するウイットネス・リーによって各地に拡大している。数年前は、イスラエルのメシアニック・ジューのグループ内にも大混乱を起こしたことがある。自分たちの翻訳聖書「回復訳」を用い、教理的には一般のキリスト教会とあまり違いがないように見えるが、既存の教会をすべて否定し、彼らのみが正当な教会と名乗るところが問題。聖書に記述があるように、一地区に一つの教会のみが存在すべきで、自分たちこそそれだと公言している。

### レムナント・久保有政などが説く「セカンドチャンス論」

日本人に福音を伝えるために有益として、聖書の教理をねじ曲げて、不信者には死後の救いの可能性がある」と主張する。『聖書的セカンドチャンス論』を無料進呈版として大量に発行し、各教会へ郵送している。

問題聖句・重要聖句の解釈・適用については、21 世紀ブックレット 35 いのちのことば社発行 ウィリアム・ウッド著『セカンドチャンスは本当にあるのか』を参照のこと。

以下に簡単に問題点を列記する。久保はこれらを用いて、聖書は死後の回心チャンスを教えていると主張するがはたしてそうだろうか？

ルカ福音書 16:19～31 「金持ちとラザロ」のストーリーを引用して、「ハデスの苦しみは神が悔い改めに導く「こらしめの苦しみ」と説明し、彼は悔い改めたに違いない」と主張する。しかし金持ちが自分の罪に対して何も語らず（悔い改めていない）、アブラハムも、金持ちがやがて救われると言うような救いを約束もしていない（救いの可能性も明記されていない）。

#### ① ルツ記 2:20 「生者と死者を捨てずして恩をほどこす」

これはボアズに対してナオミが感謝している言葉であって、死者が救われるという文脈ではない。

#### ② エレミヤ記 18:8 「之に災を降さんと思ひしことを悔いん」

神は「思い直しの神」であるから陰府でこそ発揮される、と主張するのは論理の飛躍しすぎである。

#### ③ ヨハネ福音書 5:25, 28 「死にし人神の子の声を聞き出づる時きたらん」

「死者が神の声を聞いて墓から出てくるから、救いを明示している聖句だ」と説明するが、5:29 にはっきり記されている、義者と不義者にかかわらず復活させられるという言葉が無視している。不信者の復活は裁きの復活である。

#### ④ ペテロ前書 3:18～20, 4:6 「獄にある霊に宣傳え、福音の死にたる者に宣傳えられしは」

新約聖書中、最も難解な聖書箇所であるが、ペテロが書簡を送った相手は、迫害下

にいるクリスチャンである。死んだ不信者が救われる事を強調して、彼らにとってはたして慰めとなるかどうか。背景を考え、また聖書が明確に記していないことを詮索したり、こじつけ解釈してはならない。

⑤ ピリピ書 2:10～11 「地の下にある者、、、イエス・キリストは主なりと言ひあらわして」

イエス様を主と告白することイコール死者が救われることにはならない。イエス様が主であることは絶対の真理であり、死者の悔い改めと信仰の告白と適用するには問題がある。マタイ福音書 7:21～23 にも明記されているが、いくら「主よ、主よ」と言っても救われずに刑罰に入れられる者があることを忘れてはならない。

⑥ 黙示録 5:13 「地の下に、海にある萬の造られたる物、、、願わくは、、、」  
⑤の聖句と同様。 ペテロ後書 2:1～4、9 参照。

⑦ 黙示録 20:11～15 「一つの書ありて展かる、即ち生命の書なり、、、」

「黄泉から出された者の裁きに「いのちの書」が開かれるのは、救われる者があるからではないか」と主張するが、聖書は裁かれたと記しているだけで救われる者がいるとは一言も記していない。また「黄泉にいる者が全員地獄に行くのならば、黄泉は不必要。中間状態があるのは、救われる可能性がある」と主張するが、聖書が沈黙していること、神のご計画を私たちは知り得ない。仮説や断言、こじつけ解釈は危険である。 ロマ書 1:16～20 2:6～8、 12～16

⑧ ロマ書 14:9 「死にたる者と生ける者との主とならんためなり」

文脈は死んだ不信者についてではなく、クリスチャンについて記している。ゆえに信者は生きて

いても死んでいても、主の者である。

以下の招きのみことばは、生きているうちの悔い改め、回心を促すものであつて、死んでからでも悔い改めのチャンスがあるという説を否定する。

イザヤ書 55:6、 コリント後書 6:2、 ヘブル書 3:12～13

永遠の生命をいただくためには、人が生きているときに信仰告白すべきである。イエス様の重要な宣言である、ヨハネ福音書 11:26 は「生きて我を信ずる者は、永遠に死なざるべし」と明確にそれを表している。だから私たちは、熱心に福音宣教に励まなければならないのである。

\*\*\*\*\*

(資料①) JCM ニュース No. 44 2007.10 より

## **死者の霊の祭り：ハローウィン！**

私は、あなたがたに悪霊と交わる者になってもらいたくありません。(1 コリント 10：20b)

ハローウィンとは何の祭り？

ハローウィンは幽霊やお化けに変装した子どもたちが「トリック・オア・トリート！」(お菓子をくれないと悪さをするよ！)と言って、家々を回るお祭りです。しかし毒入りチョコやカミソリ入りリンゴを与えたり、子どもを誘拐するなどの事件があり、問題となっています。

日本のある店で「ハローウインは、キリスト教の祭りの一つで、聖人の日(All Saints Day)のイブです」と書いてありましたが、キリスト教とは全く関係がないものです。ハローウインはイエスさまが生まれる数世紀前に、古代ケルト族が信じていたドルイド教(Druids)の新年 11/1 のイブである 10/31 の夜に行いました。木々が枯れる季節は死を祝うのにふさわしく、死の主(神)であるサムハイン(Samhain)と邪悪な霊をほめたたえる「死者の霊の祭り」です。日本のお盆のようなものです。教会が祝う「聖人の日」はパルティオン神殿で2世紀頃から5月に行われていましたが834年に11/1に変更されました。

欧米では文化として、ハローウインを行っている教会や団体がありますが、多くの教会は子どもをハローウインに参加させないで守るための行動をしています10/31を「聖人の日」のイブとして、子どもたちを教会に集めお化けではなく、聖書の人物の仮装パーティーを行います。子どもたちを教会に集めることで、「死者の霊の祭り」の悪影響から、彼らを守るのです。

可愛いキャラクターだけど・・・

9月末頃から可愛い魔女と黒猫、お化けカボチャ、オレンジと黒のデコレーションは楽しそうに、ショールームを飾っています。しかしその正体は何でしょうか？

黒猫を連れた黒ずくめの魔女の名はSaxonです。黒は「死の祭り」を、黒猫は「魔女の使い」を意味します。おばけカボチャはジャックのランプなどと呼ばれ、海で死んだ人の「埋葬してくれ」という死霊のランプです。これは死体のキャンドルとも呼ばれ、人々がそのキャンドル(火の玉)の後を追うと水死すると言われています。また化け物の面は見た目を気持ち悪くするだけでなく、悪霊と繋がることです。彼らの個性や能力が変わり、悪魔的なものに支配されると信じられています。だから魔女や化け物に仮装するだけでも、神さまは忌み嫌われます。そういう気味の悪いものが、可愛いものに演出されています。

悪魔的なものに関わる危険！

悪魔を礼拝する教会ではハローウインを一年で一番盛大に祝います。悪魔礼拝・魔術・呪いは、ジョークや遊びではありません。悪魔や悪霊は実際におり、悪魔に自分を捧げ、自分の願い(有名になる、金持ちになるなど)を叶えますが、彼らの最後は自殺や変死、または殺人者です。

佐世保で小学6年の女子が、同級生を殺しました。また魔女のように黒い服を着た娘が、斧で父親の首を切り殺しました。彼らは悪魔的なものに関わっていました。またデスノート(悪魔的な物語)をまねしたような殺人事件が起きました。もちろん悪魔的なものに関わったすべての人が人殺しになる訳ではありません。しかし彼らが悪魔的なものに関わらなければなければ、人を殺さなかったでしょう。軽い気持ちで関わったことが、殺人までいく可能性があるのです。

正しい選択ができる子どもに！

神さまは私たちを愛して、イエスさまの十字架と復活によって救いの道を造られました。神さまはすべての人が救われて天国に行くことを願っています。しかし悪魔は人々がイエスさまを信じる邪魔をし、彼らを滅ぼそうとします。そういう神さまの敵である悪魔的なものに関わりを持つことは神さまが大嫌いなことです。占い、呪い、呪文、霊媒(申18:9~13)、魔法(ガラテヤ2:20)などから離れることが神さまのみこころです。「ハローウインは「死者の霊の祭り」で、悪魔礼拝している人たちの



祭りです。あなたはハローウィンをして悪魔と関わりを持ちたいですか？魔法使いの魔は悪魔の魔！魔術の魔は悪魔の魔です。『ただの仮装パーティだから大丈夫！』と言いますか？それとも悪魔的なものから離れますか？あなたは神さまのみこころに従うか、罪を犯すか、選ぶことが出来ます」と語り、子どもたちが、神さまを愛し、正しい選択ができるように祈っていきましょう！ JCM 藤田 桂子

\*\*\*\*\*

(資料②) Jews for Jesus 2006 年 10 月号より

**アイデンティティーの混乱**

モイシェ・ローゼン述

解説・翻訳 石黒イサク

解説：あいかわらずイスラエルに対する誤解と、置換神学による聖書の誤用によって、キリスト教界が揺るがされています。「ジューズ・フォー・ジーザス」代表のモイシェ・ローゼン師は今回、イスラエルと教会の違いについて、簡潔でとても分かりやすい文章を書いてくださいました。コ・ワーカーの皆様は、イスラエルのアイデンティティー(身元・素性)と、教会のアイデンティティーについて、すでに良くご存じのことと思いますが、再度よく読んで確認してみてください。

そしてぜひとも、クリスチャンの友人・知人にこの記事を読んでもらってください。また牧師・伝道師などの教役者の方々にも、ぜひ LCJE のニュースなどを紹介してください。イスラエル、中東問題、聖書を論じる方々は、まずこのことをご存じの上で情報収集、世相分析をしていただきたいと思います。

すべての正統的信仰者であるクリスチャンならば、「イスラエルとは何か イスラエルとは誰を指すのか?」という質問に明確に答えられるでしょうか？ 実にこの質問に対する答え「イスラエルと教会の関係の理解」こそが、私たちの霊的生活(つまり信仰の歩み)を裏付ける聖書解釈の土台なのです。

教会に所属する多くのクリスチャンたちは、「聖書に記されている約束のすべては、私のもの」という基本的概念を持っています。つまり「旧約聖書にイスラエルと出てくるのは、教会の前身である」という見方をしているからそのように考えているのです。しかし神の約束を厳密に調べてみれば、聖書に記されている約束のすべてが祝福・恵みばかりではなく、裁き・刑罰も含まれていることがわかります。例を挙げれば、神様はイスラエルの不従順に対して、イスラエルの国家的刑罰を聖書に明記しておられます。

『汝、我が今日汝に命ずるこの言語を離れ、右または左にまがりて、他の神々に従いつかうることをすべからず。汝もし、汝の神の言葉に聴き従わず、我が今日汝に命ずるその一切の誠命と法度とを守り行わずば、このもろもろの呪い汝にのぞみ、汝におよぶべし。汝は町にても呪われ、田畑にても呪われん。また汝の飯かごも、汝のこね鉢も呪われん。汝の体の産、汝の地の産、汝の牛の産、汝の羊の産も呪われん。汝は入るにも呪われ、出るにも呪われん。』申命記8:14-19

クリスチャンで「イスラエルに対する約束のすべてを教会に適用する」という考えをお持ちの人は、この聖句を読むと失望されるでしょうね。なにしろ神様は、イスラエルの失敗に対しては「反祝福(つまり刑罰)」を与えておられるからです。残念ながらクリスチャンたちも、イスラエルよりも神に従順だと言えない者ですから、この約束に照らしてみれば、服従の義務とともに、不服従に対する痛みと世界離散の罰も受けることになります。

しかし、すばらしいことにイエシュア(イエス様)は、完全に律法を守り、神に服従されて、その義が今や、彼の身体である教会に適用されることになりました。

しかし、あいかわらず現在も多くのクリスチャンたちは、イスラエルと教会のアイデンティティーの誤解を持ち続けています。そしてその誤解から生まれた理論が横行しているのです。それは、「イスラエルは神の選ばれた民であった。現代は、神はキリストにあって私たちを選ばれた。クリスチャンの集まりである教会は、新しく選ばれた民として、イスラエルを受け継ぐ者となった。」と言うのです。清教徒ピューリタン)たちはそのように考えましたし、今日に至るまで多くの正統的キリスト教会も、そう教えてまいりました。その事により、イスラエルは「ただの隠喩・実例」として取り扱われるようになりました。もしイスラエルは隠喩としての価値しかない者ならば、今日彼らが実在しているのはなぜなのでしょう？

教会をイスラエルと見なす考えは、一つの重要な事実を無視しています。つまりイスラエルは血統のある民族であり、政治的に統制された国であり、明確な土地を所有していたという事実です。聖書をそのように解釈してしまうならば、創造の真理も、アダムとエバの存在もすべて、「隠喩」「神話」として扱うことになり、我々が理解困難な事象はすべて、神話化されてしまう危険性すらあります。筆記された聖書の御言葉を正しく解釈して、事実と比喩とを明確に区別するには、常に多くの誘惑が存在いたします。

聖書の中には、詩歌が含まれていて隠喩・比喩として解釈することができますが、これらはそれほど困難なことではありません。しかしイスラエルは神話や隠喩ではありません。イスラエル人たちは、今日でもユダヤ人と呼ばれて、私たちの地球上に現存・実在しているのです。実際の土地として、イスラエル国も存在しています。教会はイスラエルに置き換わったと言うことは、歴史を無視した考えであります。

では教会にとって、イスラエルが重要なのは、なぜでしょうか 使徒パウロは、「過去にイスラエルの不従順によって起こった数々の悪い出来事は、私たち教会にとっての実例である」(第1コリント10:6)と言っています。しかし、イスラエルはクリスチャンに対する「善悪の実例」としての価値だけではありません。聖書を貫いて教えられていることは、ルカ福音書15章の「放蕩息子」のように「イスラエルの悔い改め・神に対する叫び」であります。

イスラエルの歴史は、どのようにして神様が民を取り扱われるか、神様が何を民に求めておられるかを学ぶ、多くの教訓に満ちています。また、イスラエルに対する戒め・律法は、私たちに「贖罪」を教える豊かな教材です。例を挙げれば、祭儀の犠牲・供物の方法は私たちに「身代わりの贖い」の必要性を説きます。同様に、ユダヤ的祭日のすべては、聖書的贖いの象徴であります。最近ムーデー・プレスは『過越の祭りの中のキリスト』(Christ in the Passover 197年初版、最新刊は大幅に加筆されている)を再刊しました。またデイビッド・ブリックナー著の『仮庵の祭りの中のキリスト』(Christ in the Feast of Tabernacle)も同時期に発行されています。

祭儀に、断食に、すべての祝儀に、比喩・預言として表されていることは、イスラエルによって実際に実行されていたものでした。それらは彼らにとって、イスラエルに対する神様の誠実さ・忠実さと、神様の契約の確実さを、くり返して記憶するためのものでした。



神様のイスラエルに対する契約は、神様がイエス様を信じる者に与えてくださった契約と同様に、絶対に取り消すことのできないものであります。ですからどうして、「神の契約は一つの民(イスラエル)から移行して、今や新しい民(教会)のものとなった」などと言うことができるのでしょうか？ もしそのような解釈線上に私たちを置くなれば、「神様はやがてクリスチャンに対する契約も、他の民に移行されてしまうかも知れない」と考えなければなりません。もし神様が、イスラエルの召命を反故にされたのならば、信者の立場も危ういものとなってしまいますのです。

もし、選民としてのイスラエルの召命を神様が取り去ってしまわれて、その約束のすべてが現存するアブラハム、イサク、ヤコブの子孫たちに適用されないのならば、これほど多くの敵に囲まれていたユダヤ民族は、とうの昔に地球上から絶滅していたのではないのでしょうか？ イスラエル民族が現存することは、疑いなく神様の守りの御手が彼らの上にあったことを表しています。そしてイスラエルの存続理由も、存在目的も、神様が持っておられることになります。ここに希望があります。イスラエル国家は必ず神様の定められたご計画を成就することになります。

社会学的見地によって、イスラエルの存在理由を説明することは不可能です。

イスラエルは常に他民族から分離されていたわけではない。

イスラエルは優秀な戦士ではなかった。

イスラエルの人口も多くはなかった。実に少なかった。

しかし、イスラエルを征服した民族が滅亡した今も、イスラエルは生き残っている。なぜでしょう？

イスラエル民族は自らの存続理由を勘違いしている節があります。彼らの多くは、イスラエルが生き残ったのは、自分たちの神に対する忠誠心、自分たちの篤信、律法遵守の賜物と思っているのです。しかし真実は、預言者たちの時代から、神様に忠実だった人たちの数は常に少数でした。イスラエルの大部分の人たちは律法を破り、神の誠めに逆らいました。つまりイスラエルの信仰心や伝統がイスラエルを保存したのではなくて、全能の神様がなさった御業なのであります。この事実を目をつぶるならば、民族的自滅であります。

またイスラエルの存続理由は、近隣諸国の友情や同情によるものでもありません。イスラエルが生き残ったのは、唯一の真の神様がおられるからです。すべての生きているユダヤ人は、聖書の神様と、その御言葉の確実さを証明している生き証人なのであります。神様の御言葉は、過去に真実であったように、現在も、そして将来も真実です。

教会は神様が選ばれた「新しい民」で、その到達ゴールは天であります。イスラエルの契約のゴールは地上ですから、この二つを混同してはいけません。「キリストの御身体」と呼ばれる教会は、神の霊である聖霊によって選び出され、駆り立てられ、支配されているものです。イスラエルは律法を与えられましたので、キリストを持たない人たちは続いて律法の下に置かれています。私(筆者モィシェ)たちのようにユダヤ人に生まれ、イエシュアによって新生を体験した者たちは、二重の祝福をいただいたことになります。イスラエルとして、神の選民であるとともに、教会にも入れられたからです。再度念を押しますが、コレは、私たちユダヤ人だからではなく、すべて神様の恵みによるものであり、神様がどのような御方かを表しているものです。

だからこそ私は、正統的信仰を持っている敬虔なクリスチャンは、「イスラエルとは誰で、イスラエルとは何なのか」をハッキリと理解していただきたいと訴えているのです。イスラエルと教会の区別を誤解したとき、あなたは神様と神様の約束を誤解しているのです。クリスチャンたちはぜひ、イスラエルの役割を理解してください。私たちユダヤ人の存在こそは、聖書の神様についての証言であり、神様の忠実さの実演なのですから。

\*\*\*\*\*